



大阪ブランド戦略

大阪の四季を彩る祭礼

～ 伝統的な祭りと新しい祭りで賑わう大阪～

大阪ブランドコミッティ

祭礼パネル

目次

1 大阪の祭り	1
(1)特徴	1
(2)主な祭りで見ると大阪の一年	2
(3)大阪の夏祭り～愛染さんから住吉さんまで～	5
(4)今も昔も人々を魅了する大阪の夏祭り	6
2 大阪の祭りを支える社寺とコミュニティ	7
3 大阪の祭りが復興させた「なにわ伝統野菜」	8
4 PR戦略	10
5 まとめ	11
【資料】2005年大阪の夏祭りカレンダー	12
祭礼パネル構成メンバー	13
【参考】大阪ブランド戦略について	14

1 大阪の祭り

(1) 特徴

大阪の祭りと言えば、夏の天神祭(写真1 天神祭)を思い起こす人がほとんどであろう。ところが、大阪は祭りの宝庫である。大阪の祭りには、次のようにスゴイものがある。



写真1：天神祭

第1に春夏秋冬、多彩な祭りが繰り上げられる。まず正月は、住吉さんの初詣で明け、すぐに今宮の戎社の「えべっさん」が来る。節分を過ぎれば大阪城や天満宮の梅が咲き、3月には、道明寺天満宮(藤井寺市)で、菅原道真の霊を慰める神事菜種御供がある。4月下旬、造幣局

の桜の通り抜きの頃には、四天王寺で聖霊会舞楽の音色が境内で響く。夏は6月30日の愛染祭りから始まり、8月1日の住吉さんまで「祭り月」が続く。さらに八尾を中心に河内音頭が謡われ、9月から10月にかけては、岸和田を中心に泉州一帯で「だんじり」が疾走する。11月には「薬の町」道修町少彦名神社の神農祭があり、冬至には、なにわの伝統野菜「勝間南瓜」の振る舞いが生根神社で行われる。大阪の歳時記は、祭りとともに営まれているのである。

第2に大阪には、「古い」祭りと「新しい」祭りが混在している。古いものといえば、四天王寺の聖霊会(4月22日)は、聖徳太子の命日に舞楽が奉納されるもので、その古さとともに、インド・中国・朝鮮半島の文化を継承したものとして国の重要無形民俗文化財に指定されている。室町時代に創建された野里住吉神社(2月20日)の一夜官女祭は、荒れる中津川を鎮めるために少女を神に捧げたという故事に因んでいる。

これら「古い」祭りに対し、新しい祭りの創出にも目を見張るものがある。5月の連休に中之島公園一帯で行われる中之島まつり、10月の御堂筋パレード。8月のPL花火や淀川花火も、今ではすっかり大阪の夏祭りとなっている。また2月には、堂島薬師堂の節分お水汲み祭りがあるが、これは再興されて3年の新しい祭りである。

第3に大阪には日本の祭りばかりか、アジアの祭りがある。その代表は、11月の四天王寺ワッソである。朝鮮半島からの仏教渡来という故事、在日韓国・朝鮮人の集住という背景をもとに創出された祭りであるが、大阪の国際性を物語る祭りである。さらに生野区や浪速区・八尾市などでは、旧暦正月を祝う春節祭が毎年、韓国・朝鮮人、華僑、ベトナム人に大阪の市民が加わって催されている。大正区の沖縄出身者を中心に9月に行われるエイサーも、大阪の祭りにアクセントを付けている。東アジア・東南アジアとの交流を通じて形成されてきた大阪の国際性が、大阪の祭りを豊かなものに行っているのである。

(2) 主な祭りで見える大阪の一年

このように豊かで多彩な大阪の祭りだが、ピークは夏にある。そこで「夏の祭り」は別に扱い、まず春から夏、秋から冬の祭りを紹介する。

1月10日 十日戎 今宮神社



「十日戎」の祭礼は各地の戎神社で行われるが、今宮神社の祭礼が商都大阪を象徴するものとしてもっとも賑やかである。今宮神社は難波からほど近い町の中に鎮座する。9日の宵宮から始まり、10日には宝恵籠が、地元商店街の協力の下、芸能人や野球選手、文楽人形を乗せて、ミナミの繁華街を練り歩く。11日の後宴祭まで、「商売繁盛で笹もってこい！」のお囃子が境内に響き渡り、金の烏帽子を被った福娘たちが参拝客に福笹を授与する。毎年この福娘を選ぶコンテストも祭礼には欠かせない。

2月3日 堂島薬師堂節分お水汲み祭り 堂島薬師堂

堂島薬師堂を中心に開催されるこの祭りは、地元で古くから続いている「節分祭」と春と福を呼ぶ「お水汲み祭り」が一つになったもので、平成15(2003)年に再興した。お堂では、僧侶が参拝者の竹筒護符にお香水(こうずい)を汲み清めるほか、北新地芸妓衆による踊りの披露や護摩焚きが行われる。夕刻には北新地を龍が巡行し、鬼を中心とした隊が町を回り歩き、鬼に豆を投げ約を払う鬼追いなどが行われる。



2月20日 一夜官女祭り 野里住吉神社

「いちよかんにょ」祭りという珍しい名前の祭礼。大阪には住吉大社を筆頭に住吉神社が多数あるが、野里・姫里・歌島を氏子とする野里住吉神社は、かつて中津川が流れ、「野里の渡し」があったデルタ地帯に位置し、村人は度重なる水害と疫病に悩まされていた。そのため、白羽の矢が当たった(実際は籤による)家の少女が官女姿になり、人身御供として唐櫃に入れられて神社裏の龍池に放置されていたが、ある年、通りがかりの武士が少女の身代わりになったところ、翌朝そこにはヒビが死んでいたと言い伝えをこの祭りで後世に伝えている。

3月25日 菜種御供大祭 道明寺天満宮



平安時代、藤原時平の讒訴(ざんそ)によって九州大宰府に左遷され、その地で没した菅原道真の霊を慰める神事。九州への途次、道真がおばの覚寿尼を訪れる話は、『菅原伝授手習鑑』でよく知られている。神前に菜の花とクチナシの実で黄色く染めた団子が供えられ、菜の花で飾った花車と稚児が行列する。河内地方に春の訪れを告げる神事でもある。

4月 聖霊会舞楽大法要 四天王寺



聖徳太子の命日（旧暦2月22日）にあたるこの日、境内六時堂と亀の池に掛かる石舞台を中心に行われる行事で、太子の霊を慰める法要と古式ゆたかな舞楽の奉納が行われる。太子の御影を先頭に本堂から僧侶・楽人らが行列、六時堂と石舞台前の楽舎に到着すると、法要が始まり、ついで振鉦（えんぶ）を皮切りに舞楽がつぎつぎと奉納される。舞いもさることながら、左方の唐楽、右方の高麗楽のそれぞれの豪華な衣装、笙・箏・篳篥・竈笛などの音色、真紅のマンジュシャゲの飾りなど見所が一杯ある。

5月 中之島まつり 中之島公園

昭和48（1973）年、中之島公園一帯の景観保存を目的に、市民手作りの祭りとしてスタート。「手づくり・輪づくり・まちづくり」をテーマに、さまざまなグループ、企業・団体が参加し、ゴールデンウィークの祭りとしてすっかり定着した。重要文化財の中央公会堂・中之島図書館などの周辺に、コンサートやリサイクルショップ、模擬店・露天が立ち並び、多数の市民が行きかう。

6月14日 御田植神事 住吉大社



「住吉のおんだ」ともよばれ、神功皇后が住吉大神を祀られた時に、神饌田を設け、長門国から植女を召して田植えをさせたことに始まると伝える。奉仕の植女などが参集、粉黛・戴盃式を行って、神事に参加する資格を得ると、第1本宮で五穀豊穡を願う祭典に参加する。その後、宮司に導かれ「おんだ」を一回り、「おんだ」に特設された舞台から御神水が注がれ、お祓いを受けた早苗が植女に渡されると、田に下り、一列になっての田植えが始まる。田植えの間、舞台では田舞・神田代舞（みとしろまい）・風流武者の登場などがあり、最後に住吉踊りが踊られる。

7月 次項「大阪の夏祭り」参照

8月24日 がんがら火祭り 五月山愛宕神社ほか（池田市）

北摂を代表する祭り。池田は西国街道と能勢街道の交わる交通の要衝に位置し、市場町として繁栄してきた。「がんがら祭り」は、池田の町衆が江戸時代から伝えてきた祭りで、町が大火に見舞われた後、火災をまぬがれた大工や火消したちが始めたといわれる。愛宕神社本殿で祝詞奏上のあと、大護摩の残り火から採られた神火が松明に移され、大工衣装を身に着けた若者たちによって山を下り、途中、「大」と「一」の文字に点火、最後に4本の松明で「人」文字を作る。ガンガラとなる半鐘の音が池田の町に響き、人々は松明の燃えがらを火難除けのお守りに拾って帰る。



9月14・15日 **岸和田だんじり祭り** 岸城神社ほか（岸和田市）

元禄 16（1703）年、岸和田藩主岡部長泰が城内に伏見稻荷を勧請したことに始まる祭礼。この時、長持ちに車をつけたような「だんじり」が城内に入り、獅子舞やにわか芸で殿様のご機嫌をうかがったことに始まるとされる。各町のだんじりには故事になった見事な彫り物がある。昼の曳行では、だんじりの大屋根で踊る大工方、揃いの法被をつけ疾走する曳き手、前艇子と後艇子とが腕の見せ所を競うやりまわし、岸城神社などへの宮入、リズムをつけた囃子太鼓など、感動と興奮が充満する。夜には一転して、約 200 個の提灯に飾られただんじりが静かに曳行される。



10月 第2日曜日 **御堂筋パレード** 御堂筋



大阪はもちろん、日本を代表するメインストリート御堂筋を会場に行われる一大パレード。昭和 58（1983）年、「大阪築城 400 年まつり」から生まれた。大阪市役所前の広場で水のセレモニーが済むと、いよいよパレードの出発。銀杏が色づき始めた御堂筋を趣向を凝らしたフロートやマーチングバンドが行進、企業出品のフロートには毎年、それぞれのテーマを形にして観客を楽しませる。海外や日

本の各地からの舞踊団、郷土芸能も参加し、難波高島屋前までの 3.4 キロメートルをパレードし、100 万を越える人々が沿道から歓声を送る。

11月初旬 **四天王寺ワッソ**

古代大阪で繰り広げられた東アジアの国際交流を雅やかに再現した祭り。会場となる「なにわの宮跡公園」では、渡来使節団や彼らを迎える日本の偉人に扮した人をはじめ、1,000 人近くがパレードし、衣装、小道具から楽器に至るまで忠実に再現された古代の交流儀式が行われる。「ワッソ」とは現代韓国語で「来た」という意味で、古代の人々が大阪にやって来ては繰り広げた国際交流を再現する祭りの名称となった。



11月22・23日 **神農祭** 少彦名神社

日本薬祖神少彦名命と古代中国の三皇の一人神農を祀る道修町少彦名神社の例祭。江戸時代から薬種商の集まり、寄り合い所の庭に祠を祭ったのが神社のはじまりという。明治期に建立された社殿で神楽が奉納され、虎をつけた笹を持って巫女が「虎の舞」を舞う。この虎のお守りは、大阪でコレラが大流行したとき、薬種仲間が丸薬に付けて施与したのがはじまりとされる。この日ばかりは、製薬業者の並ぶ街道修町のビジネス街が縁日と変わり、神虎を求める人々で賑わう。

12月冬至 **勝間南瓜神事** 生根神社

「冬至には南瓜に柚子の風呂」と言われているが、名産勝間南瓜で知られた勝間村、現代の玉出・岸里・千本地域一帯の産出の小ぶりの南瓜の煮物の炊き出しを求める人々で賑わう。同じく名産田辺大根の炊き出しで賑わうのが、法楽寺（東住吉区）の「終い不動」で、ともに「なにわ伝統野菜」の復興と普及の場となっている。

(3) 大阪の夏祭り～愛染さんから住吉さんまで～

これほどに大阪は祭りの宝庫であるが、なかでもハイライトは夏7月の祭りである。この大阪の夏祭りのスゴサは第1に、およそ1ヶ月間、連日、各種の祭りが続くのである。その詳細は、添付した「夏祭りカレンダー」に見るとおりである。カレンダーは、6月30日の愛染祭りから始まり、8月1日の住吉祭りで終わっているが、載せる祭礼の数、じつに94件に上る。しかも、その祭礼が日数にして27日間もあり、カレンダーをほぼ埋め尽くしている。空白は7月3～5、10、29日のわずか5日に過ぎない。来る日も来る日も、所を変えて祭りが行われているのである。

ところで日本の祭りは、春秋の祭りから始まったとされている。春は農耕の稔りの予祝祭として、秋は稔りへの感謝を捧げる祭りとして行われたのである。ついで農閑期の祭りとして冬の祭りが催され、夏祭りは最後に来る。夏祭りには、茅の輪をくぐることで、夏の暑さを乗り越え、疫病や飢饉の災難からも逃れられるようにとの願いがこめられた。その意味で夏祭りは、人々の密集する都市型の祭礼である。近世の大阪は、最盛期人口40万人を数えた大都市であったが、そこで夏祭りは育まれた。(写真2 住吉祭の茅の輪くぐり)



写真2：住吉祭の茅の輪くぐり

かつて近世には北組・南組・天満組を合わせて三郷といったが、そこが現在の大阪市内の中核を形成している。その三郷に鎮座する天満宮・御霊・座摩・難波・生玉・玉造稻荷・高津・御津八幡・難波八坂の9社の祭りが、すべてこの時期に行われているのである。その代表格が、大阪天満宮の天神祭りで、7月24日の鉾流し神事で幕を開け、翌25日の陸渡御をへて、船渡御でクライマックスを迎える。

このような都市型祭礼に、七夕に因む祭礼(7月7日 星田妙見宮や機物神社(交野市)の七夕祭り)、旧暦6月の半夏生までに田植えを終えたあとの慰労という農耕的要素(7月2日 石切神社)さらに修験道の開祖役行者の命日に因むという伝承(7月7日 箕面瀧安寺)さらに夏の浴衣を着はじめる浴衣祭り(6月30日 愛染祭り)などが加わり、大阪の夏祭りをさらに豊かなものになっている(写真3 機物神社の境内)



写真3：機物神社の境内

(4) 今も昔も人々を魅了する大阪の夏祭り

このような豊かな大阪の夏祭りは、古くから多くの人々を魅了してきた。幕末期に、大坂町奉行として本町橋のたもとの役宅で7年間過ごした久須美祐雫は、随筆「難波の風」の中で、つぎのように記している。

「当地の諸神社、六月を祭礼月となし、三郷中殊の外に賑い、引きものだんじり躍りなど、思ひ思ひに趣向ありて大いに繁花なり」

江戸人である久須美を驚かすにたる祭礼と賑わいが、大坂にはあったのである。

久須美だけではない。狂歌師で有名な大田南畝は、享和元(1801)年の3月から丸1年、大阪の銅座で勤務するが、その折の日記「蘆の若葉」は、6月17日に御霊社、21日には仁徳天皇稻荷明神、22日には座摩社と祭礼のオンパレードである。彼の目の前には『摂津名所図会』などで活写された祭礼のシーンが展開していたことであろう。(写真4 座摩社 摂津名所図会「夏祭車楽囃子」)

6月24日の天満天神祭礼に間に合うべく、「必ず大坂にいたらんかと往日、努力」したのは幕末の志士清川八郎とその母である。彼らは安政2(1855)年、江戸から安芸宮島(広島県)をめざして大旅行を敢行、その帰路、大坂に足を踏み入れ、天神祭りを見たのである。

その八郎、祭礼には土地柄がもっともよく現れるとの考えから、京都・江戸・大阪の祭りを比較する。人気柔弱で外美を好む京都、人気手荒く、祭礼

の競い合いが余りに鋭すぎる江戸と比べて、大坂は「剛柔相かない、人情において中道というべきなり」と評している。つまり大阪の祭りは洗練されているということだが、「われ少小より天下を経歴いたし、六十余州あらかじめ踏らぬ所もあらず」(『西遊草』)と豪語する八郎だけに、この評価には説得力がある

これら旧暦6月の祭りが、太陽暦施行後、おおむね7月に読み替えられて、現在の大阪の夏祭りとして継承されているのである。

近代に入っても大阪の夏祭りは、人々をひきつけた。菅楯彦(1878~1963)は、鳥取生まれながら長年大阪に住み、みずから「楽人」と称し、四天王寺の箏の舞楽を復興するなど、大阪の祭礼の復興に生涯をかけ、大阪名誉市民第1号の榮譽を受けた。



写真4：座摩社「夏祭車楽囃子」

2 大阪の祭りを支える社寺とコミュニティ

さて、このように多種多様な大阪の夏祭りは、府下の寺院・神社を舞台に催されている。したがって担い手は、いうまでもなく地域のコミュニティである。いいかえれば大阪の祭礼は、社寺とコミュニティが支えている。

船場生まれで、現在も「船場を語る会」で活躍する近江晴子氏（大阪天満宮研究所）は、両親たちの言として「氏神さんのお祭りとなると、町全体がガラッと様子を変えてしまう」と述べる。地域再生の場が、祭りであった。

明治安田生命「関西を考える会」の調査によると、大阪府下の寺院数は3,483で、愛知県について全国第2位である（ちなみに京都は3位）。一方、神社は725で、下から数えて4番目にあたる（『関西と寺社』）。寺院の多さと神社の少なさが、大阪の宗教施設の特徴であるが、同時に、「関西では、関東と違って、生活のさまざまな側面に、祭礼や日常的な行事として（社寺が）入り込んでいます」と語る（「関西を考える会」代表真野修三氏）。

社寺と祭礼で興味深いのは、7月11～14日に行われる平野郷（大阪市平野区）杭全神社の夏祭である。杭全神社から出発した御輿が途中、長方寺・善光寺という立ち寄り、神職と僧侶がともに御輿を拝むが、これなどは日本の伝統的な神仏習合の名残として大いに注目される（写真5 長方寺門前）。

他方、祭礼には、地域社会のコミュニティが凝集している。祭礼には老いも若きも参加し、写真5に見る少女の頬に捺された朱印は、生国魂の神の加護が、氏子である彼女を見守っているという象徴であろう（写真6 いくたま夏祭朱印）。

したがって氏子圏の再生が、大阪の祭礼の存続の将来を決めるともいえるが、その点で、四天王寺ワッソや堂島薬師の水掛祭りなどの新しい祭りが創出され、大阪を代表する祭となって人々に親しまれているのが大阪の祭りの特徴でもある。

また注目されることとして、かつての祭礼の復興が試みられていることである。たとえば天神祭りには、天満天神宮御伽衆というボランティア団体があるが、平成17年度の祭礼には、「造り物」として蜷の藤棚と乾物の猩々舞を復興し、奉納している。「造り物」は、近世の大阪では神事・祭礼の度に趣向を凝らして作られ、人々を魅了したもののだが、近代以降に忘れ去られた。その復興にかける人々が、現在、登場し、活躍しているのである。



写真5：長方寺門前



写真6：いくたま夏祭 朱印

3 大阪の祭りが復興させた「なにわ伝統野菜」

大阪の祭りには、地域社会に根付いた伝統とともにあった。しかし、都市化が進み、地域社会のコミュニティが変化しつつある現在、ボランティア団体等も祭りの担い手として重要な役割を担っている。例えば、「天満天神宮御伽衆」というボランティア団体は造物（つくりもの）を再興した。彼らは、平成 17 年度に蜆の藤棚と乾物の猩々舞を奉納した（写真 7 造り物 シジミの藤棚）。この大量の蜆は大阪の河口で採取され、奉納されたとのことである。まさに、祭りが大阪の水産業に直結している。祭りのもつ「付加価値」が、ここにはある。



写真 7：造り物 シジミの藤棚

造物のうち目を引くのは、玉出の生根神社（住之江区）のだいがくという山車であろう（写真 8 玉出のだいがく）。合計 66 個の提灯が飾られ、天をつく様のだいがくは、見るものに東北地方のねぶたを想起させる。日程が天満天神祭りとなるためか、市民にもよく知られているとは言いがたい。明治時代には、大勢の若者に担がれて町内を練り歩いたというが、今は縦横に張り巡らされた電線が、それを妨げているのが残念である。



写真 8：玉出だいがく

大阪の祭りが復興のきっかけを与えたものとして、近年、とくに注目されるのは「なにわ伝統野菜」である。その代表は大阪の誇るお稲荷さん、玉造稲荷社の越瓜の振舞いで、7 月 15～16 日の祭礼では、参拝者になにわの伝統野菜黒門越瓜（しろうり）が、振舞われる（写真 9 黒門越瓜のふるまい）。黒門とは大阪城の玉造門が黒塗りであったことに由来するが、その近辺の畑場で栽培された越瓜で、伊勢神宮に群参する「おかげ参り」によってひろく喧伝された。



写真 9：黒門越瓜のふるまい

「なにわの伝統野菜」とは、江戸時代の大阪周辺農村で栽培され、消費されていた毛馬の胡瓜、玉造の越瓜、勝間の南瓜、天王寺蕪、田辺大根、吹田くわいなど指し、現在、大阪府によって 16 品目が指定されている（写真 10 なにわ伝統野菜）。今日、野菜といえば京野菜をイメージするが、江戸時代には、天満の青物市場を擁する大阪の周辺農村が野菜の名産地であった。その伝統を踏まえ、なにわ野菜の復興に向けた努力が、各方面で取り組まれているのであるが、大阪の祭りが、そのチャンスを与えている。



写真 10：なにわ伝統野菜

黒門越瓜（しろうり）が夏祭りによって復興の場を与えられたとするなら、「勝間南瓜」と「田辺大根」は、冬の祭礼に、その場を得た。勝間南瓜が12月冬至の日に生根神社（住之江区）で、田辺大根は法楽寺（東住吉区）しまい不動で、それぞれ振舞われている（写真11 田辺大根のふるまい）。



写真 11：田辺大根のふるまい

4 PR戦略

祭りをはじめとする文化資源の活用は、資源を作り出し、担ってきた寺社や地域コミュニティの活性化にも連なる。そこで、つぎのような情報発信戦略を提案する。

- (1) 大阪夏祭りカレンダー
- (2) 大阪遺産写真展となにわ・大阪カレンダー
- (3) なにわ・大阪祭りネット

(1) 大阪夏祭りカレンダー

どの家にも暦、カレンダーはある。暦・カレンダーが時を刻むシンボルであると同時に、時を知る手立てとなっているからである。そこにはおおむね上段に車や自然、動物などさまざまな趣向が凝らされ、下段に無表情に並ぶ1ヶ月30前後のマス目を飾り立てている。しかし刻む時間は、春夏秋冬一年の季節の移ろいを示すものだけに、やはり車やゴッホの絵よりも、移ろう季節や四季折々の風情、年中行事の方が合っている。そこに目をつけ大阪の祭りカレンダーを作ろうというのである。

論より証拠。大阪の夏を彩る連続した祭りは、1ヶ月の暦を飾るのにうってつけである。そこで試作した夏祭りカレンダーを末尾に掲載する(【資料】2005年大阪の夏祭りカレンダー)。残念ながら、マス目にデジタル画像を挿入できていないが、それができれば色彩豊かなカレンダーが実現する。一家にひとつのカレンダーを通じて、全国の人々は、大阪の祭りと文化の豊かさを再認識するであろう。

(2) なにわ・大阪遺産写真展と大阪カレンダー

7月のカレンダーが、このように祭りで埋めることができれば、正月から12月までを通した「大阪祭りカレンダー」が構想できる。たとえば8月にはPL教会の花火や淀川花火など花火大会が多く、祭りと花火で8月のカレンダーは出来る。9月は、岸和田を初めとするだんじりが、泉州大阪南部一体では目白押しなので、9月はだんじりカレンダーができるだろう。

しかし、どうしても空白を生じる月があるのは避けがたい。そこで大阪の文化遺産を最大限、動員するのである。

大阪の文化遺産は、なにも祭礼に限らない。史跡もあれば、工芸品も、建築物も、はたまた食材も野菜もある。こうして、とにもかくにも大阪の遺産を集約したカレンダーを作るのである。いいかえるなら大阪カレンダーが、大阪の文化遺産目録にもなり、「大阪案内」への何よりの近道となる。

その場合、大事なことは大阪人や他府県の人々に大阪遺産を再発見するチャンスを与え、市民参加型で、大阪カレンダーを作成することである。その手段となるのが、なにわ・大阪遺産写真展の開催である。

大阪に暮らす人が、働く人が、通勤する人が、また大阪城や文楽を見にきた人々が、朝な夕なに、ランチタイムに、アフターファイブに、これぞ大阪の遺産という被写体を捉え、デジタルカメラや使い捨てカメラ、写メールで撮影する。それを各月のテーマに合わせて募集し、選考ののち、優秀作品を展示する。もちろん会場の確保と賞金の用意がいるが、それは企業・大学をはじめ民間団体に提供してもらい、大阪あげてのプロジェクトとする。

(3) 大阪祭りネット

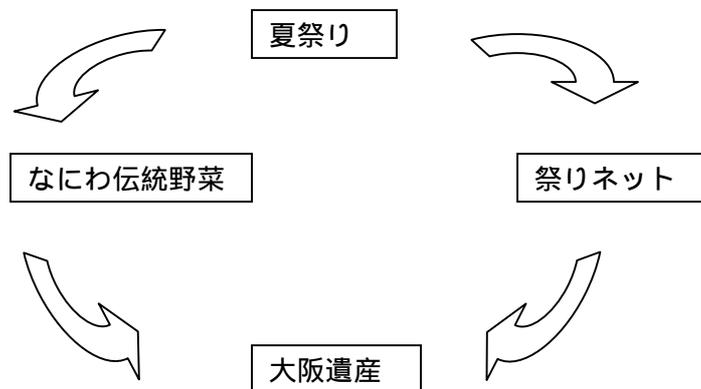
大阪の祭りのイメージを高めるには、大阪の遺産のすばらしさに直接、触れてもらうことである。その点、祭りには理屈を超えた面白さと文化遺産としての深みがある。それならば大阪の祭りを総合化して、全国に発信してはどうか。

祭りが、身近な広告塔になるならば、ガイド役をつとめるのはネットである。ネット社会である現代に、大阪の祭りを発信する上で、日本国内外の読者、観光客を想定した、正確な祭りデータと解説、および画像データの提供が不可欠である。そこで、大阪祭りネットの構築が、第3の戦略となる。

5 まとめ

祭りは人々の暮らしとともにある。人々の記憶とともにある。そして人々の喜びとともにある。祭りが、「賑わいの町」の核となる所以であり、上記の戦略を提起する理由でもある。

しかも大阪の祭りは、大阪人の想像を超えてゆたかで、かつ創造的である。その豊かさの象徴である「夏祭り」を基点に、大阪の生み出した新旧の祭り、さらになにわ伝統野菜のような祭りの周辺、大阪遺産の発見、祭りネットと発展すれば、そこに「賑わいの町」復活の戦略的なプランが描けることとなる。簡単に図化すれば、次のようになるだろう。



【資料】 2005年 大阪の夏祭りカレンダー

月	火	水	木	金	土	日
6/27	6/28	6/29	6/30 愛染祭(勝鬘院愛染堂、天王寺区) 宝恵駕籠行列 茨木神社 大祓・輪くぐり神事(茨木市)	7/1 愛染祭	7/2 愛染祭 石切劔箭神社・献牛祭(東大阪市)	7/3
7/4	7/5	7/6 機物神社・七夕祭(交野市)	7/7 機物神社・七夕祭 七夕飾・茅の輪くぐり 龍安寺・採燈大護摩供(箕面市) 開山忌 護摩壇 金剛山蓮華祭:葛木神社・転法輪寺 (千早赤阪村・御所市) 護摩壇 小松神社(星田妙見宮・交野市) 七夕飾 安倍晴明神社・七夕祭(阿倍野区) 大阪天満宮・星愛七夕祭(北区)	7/8 大津神社・夏越祭(羽曳野市)	7/9 大森神社・灯籠祭(第2土曜・熊取町)	7/10
7/11 杭全神社夏祭(平野区) 足洗神輿川行事 生國魂神社・いくたま夏祭(天王寺区) 枕太鼓・獅子舞	7/12 杭全神社夏祭 地車合同曳行 生國魂神社・いくたま夏祭 渡御祭 難波八坂神社・夏祭(浪速区) 白鳥神社・夏祭(羽曳野市)	7/13 杭全神社・夏祭 地車宮入り 難波八坂神社・夏祭(中央区) 堀越神社・夏祭(天王寺区) 五社神社・例祭(池田市) 細河神社・例祭(池田市)	7/14 杭全神社・夏祭 神輿渡御 難波八坂神社・夏祭 茨木神社・夏祭(茨木市) 枕太鼓 玉祖神社・夏祭(八尾市)	7/15 玉造稻荷神社・夏祭(中央区) 玉造黒門白瓜のふるまい 大江神社・夏祭(天王寺区) 久保神社・夏祭(天王寺区) 五條宮・夏祭(天王寺区) お初天神(露天神社)・夏祭(北区) 地車囃子 茨木神社・夏祭 玉祖神社・夏祭 八坂神社・例祭(池田市)	7/16 玉造稻荷神社・夏祭 感田神社・太鼓台祭(貝塚市) 太鼓台 日根神社・ゆ祭(泉佐野市) 五社首頭 大江神社・夏祭 久保神社・夏祭 五條宮・夏祭 お初天神(露天神社)・夏祭 門真神社・例祭(門真市)	7/17 感田神社・夏祭(第3日曜ごろ) 瓢箪山稻荷神社・夏祭(東大阪市) 高津宮・夏祭(中央区) 日根神社・ゆ祭 春日神社・夏祭(泉佐野市) 伊居太神社・例祭(池田市)
7/18 瓢箪山稻荷神社・夏祭 高津宮・夏祭(氷室祭) ございばの神饌、張り子の虎 河堀稻生神社・夏季大祭(天王寺区) 呉服神社・例祭(池田市) 住吉大社・住吉祭 神輿洗行事 (第3月曜・住ノ江区・大阪南港)	7/19 東高津宮・夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社・夏祭(福島区) 河堀稻生神社・夏季大祭	7/20	7/21 坐摩神社・夏祭(中央区) せともの祭り(~24日) 難波神社・氷室祭(中央区) 三光神社・神祭(天王寺区) 寺方の提灯踊り(守口市)	7/22 坐摩神社夏祭 難波神社氷室祭 氷柱の奉納 三光神社神祭 能勢妙見山・虫払会祈・会(能勢町) 寺方の提灯踊り	7/23 陶器神社・陶器祭 陶器人形 科長神社・夏祭(太子町) 星田妙見宮・妙見祭(交野市)	7/24 大阪天満宮・天神祭(北区) 銚流し神事・茅の輪くぐり 生根神社・だいがく祭(西成区) 科長神社・夏祭(第4日曜) 船形だんじり・三番叟・八社太鼓 佐太天満宮・夏祭(守口市) 道明寺天満宮・天神祭(藤井寺市)
7/25 大阪天満宮・天神祭 陸渡御・船渡御 生根神社・だいがく祭 だいがく舁き 紀部神宮・例祭(池田市) 佐太天満宮・夏祭(守口市) 渋川神社・逆祭(八尾市) 道明寺天満宮・天神祭	7/26 渋川神社・逆祭	7/27 渋川神社・逆祭 安倍晴明神社・夏祭(阿倍野区)	7/28 興覚寺ほうろく灸祈禱 (土用丑日・堺市) 安倍晴明神社・夏祭	7/29	7/30 住吉大社・住吉祭(住吉区)	7/31 住吉大社・住吉祭 夏越祓神事・茅の輪くぐり 道陸神社大祓祭(貝塚市) 堺大魚夜市(堺市)
8/1 住吉大社・住吉祭 神輿渡御祭 住吉大社宿院頼宮 荒和大祓神事(堺市) 恩智神社・恩智祭り(八尾市) 布団太鼓 一岡神社・祇園祭(泉南市)	8/2	8/3	8/4	8/5	8/6	8/7

〔参考文献〕

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターNews Letter 『難波潟』No1、No2
NOCHS レクチャーシリーズ 『なにわ・大阪の神社』2005 . 12 . 31
旅行ペンクラブ編 『大阪の祭』東方出版、2005 . 7
森まゆみ 『東京遺産』岩波新書、2003 『森まゆみの大阪不案内』筑摩書房、2003

祭礼パネル構成メンバー * 敬称略

〔座長〕

関西大学文学部教授 藪田 貫
なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー

〔委員〕

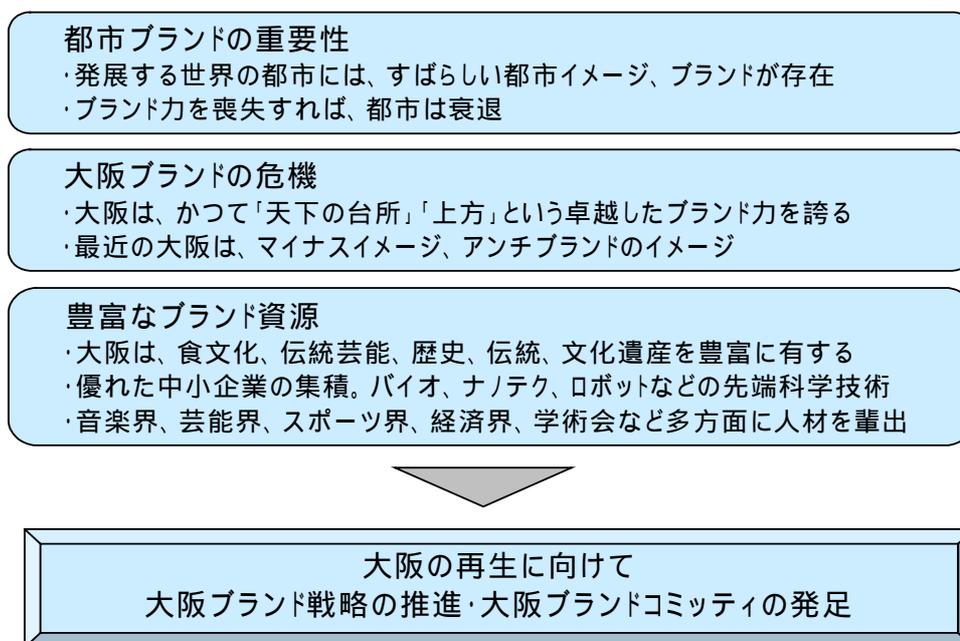
関西大学文学部教授 高橋隆博
なにわ・大阪文化遺産学研究センター長
関西大学文学部助教授 黒田一充
なにわ・大阪文化遺産学研究センター祭礼遺産リーダー
なにわ・大阪文化遺産学研究センターリサーチアシスタント 内田吉哉
なにわ・大阪文化遺産学研究センターリサーチアシスタント 内海寧子
大阪城天守閣主任学芸員 北川 央
大阪天満宮文化研究所所員・「船場を語る会」会員 近江晴子
大阪中央卸売市場本場市場協会資料室長 酒井亮介
道明寺天満宮宮司 南坊城充興
清文堂出版会長 前田成雄

〔祭礼パネル事務局〕

関西大学文学部事務室

【参考】 大阪ブランド戦略について

■ 大阪ブランドコミッティの設立趣旨 ~ 大阪に吹く新しい風 Brand-New Osaka ~



■ 大阪ブランド戦略の概要

「大阪ブランド戦略」の意味

大阪という言葉から連想される良いイメージ(ブランド=都市魅力)を回復、向上、確立し、情報発信する活動。
(大阪が自信と誇りを取り戻し、新たな発展に向かう気概を内外にアピールする運動)

目的

大阪ブランド戦略の目的は、「大阪の再生」。
新たな大阪のイメージ < Brand-New Osaka > を創出、定着させ、人、もの、資金、情報、企業を呼び込むことで、「大阪の再生」を目指す。

活動内容

大阪を知る

大阪の魅力をアピールできる歴史・伝統・文化遺産、優れた技術・企業・人材などを「ブランド資源」(大阪の強み)として発掘又は再評価する活動。

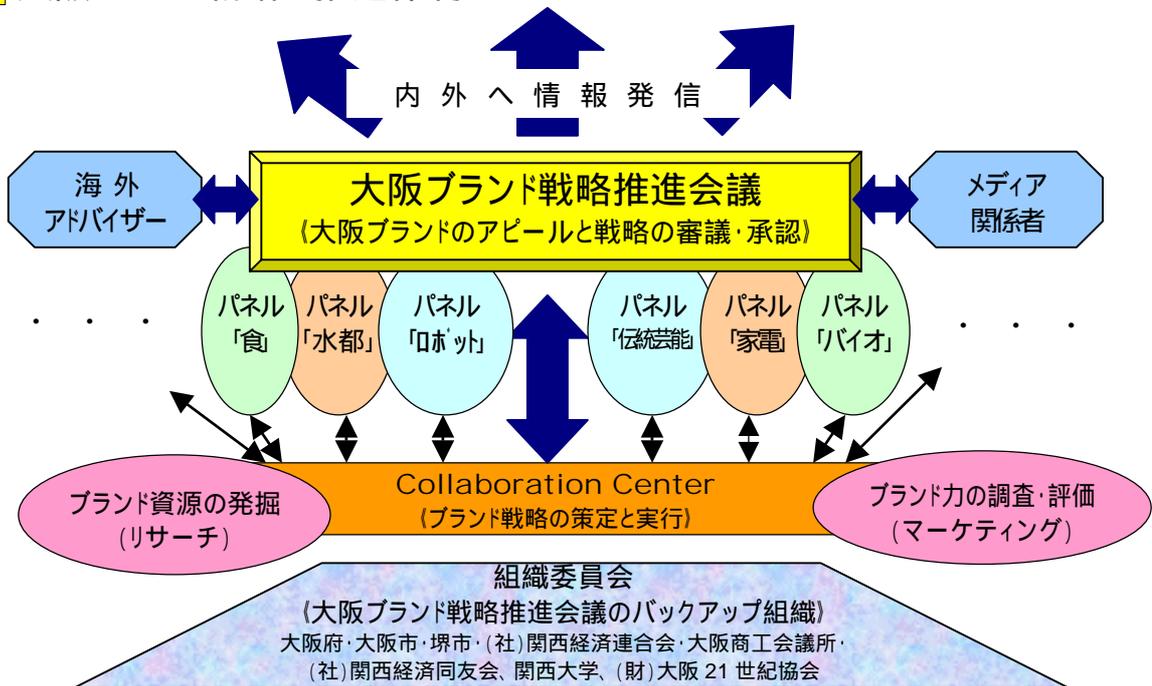
大阪を磨く

「ブランド資源」について、価値の明確化、新たな魅力の付加等により、その魅力を増大させる活動。

大阪を語る

「大阪ブランド」を統一的消息として、国内外に向けて戦略的に発信する活動。

大阪ブランド戦略の推進体制



大阪ブランドコミッティにご協力いただいている方々

大阪ブランドコミッティ

【大阪ブランド戦略推進会議】

議長	安藤忠雄氏(建築家・東京大学名誉教授) コシノヒロコ氏(デザイナー) 坂田藤十郎氏(歌舞伎俳優)
顧問	梅棹忠夫氏(国立民族学博物館顧問) 大久保昌一氏(大阪大学名誉教授) 岸本忠三氏(大阪府特別顧問) 宮原秀夫氏(大阪大学総長)
委員	専門家、有識者、文化人など約100名

【コラボレーションセンター】

チーフ	堀井良殷氏((財)大阪21世紀協会理事長)
-----	-----------------------

【組織委員会】

委員長:	熊谷信昭氏((財)大阪21世紀協会会長)
委員:	太田房江氏(大阪府知事) 關 淳一氏(大阪市長) 木原敬介氏(堺市長) 河田悌一氏(関西大学学長) 秋山喜久氏((社)関西経済連合会会長) 野村明雄氏(大阪商工会議所会頭) 寺田千代乃氏((社)関西経済同友会特別幹事)